◆２００８年　１１月

八木健選 「七句」

**１．　眠れない不況和音の虫の宿**　高橋真紀子

虫の声を騒音として、季語の本意を裏切るところがいい

**２．　子一人にじじばば四人七五三**　種谷良二

少子化で、ちやほやされて・・思い上がるんだね

**３．　足湯てふ混浴ぬくし草津の湯**　飛田正勝

混浴も足湯ぐらいが丁度よい年齢か

**４．　むかご飯滋味あるものは主張せず**　百千草

確かに薄っぺらな奴ほど喧しいね

**５．　笠脱げば老でありたり風の盆**　田代青波

可笑しいが哀しい　どんでん返しですな

**６．　ＯＦＦ ＯＮのボタンで終る冬仕度**　小杉　隆

エアコンを暖房に切り替えて冬仕度完了

**７．　両の乳双子に頒つ豊の秋**　可知豊親

母性の恍惚の風景と見ました・・健康的でよろしい

---

青山桂一

天高し木立ちダリアも届きけり
だんだんと隙間を埋めて鴨棲めり
秋闌ける背をそむけあふ番亀

麻生やよひ

軽々と失言のごと草の絮
おこぼれよりお先に失礼稲雀

足立淑子

突然にキレる少年雪起し
冬薔薇疑うなかれ女の歳
エンタメの話題が好きな雪女郎

安藤淑子

紅葉山唯我独走エコドライブ
観客より演者の多き文化祭
滑稽句朗らかなればよく生まる

飯塚ひろし

出来しなのガードレールに大根干す
車捨て手ぶらで戻るおでん酒
マスクして大銀行を下見かな

井口夏子

ちちろ虫夜明近くに寝言ゆふ
風掴みひとり遊びの゛のこ草
能書きをたれて我慢の芋煮会

稲沢進一

ちくわには穴が勤労感謝の日
渋柿や人を拒まず頑張らず
四・五脚の椅子ある書店読書の秋

奥脇弘久

貴船菊羅漢の袖にそつと触れ
芒原きつねの尻尾見失う
秋深し今日は主役の土手南瓜

倉方　稔

グリーン車の客席まばら隙間風
質流る舶来カメラ一葉忌
木枯しの先頭に立つ坂の上

小杉　隆

菊咲かす老人会に青年部
口癖の呆けた呆けたの秋日和
ＯＦＦ ＯＮのボタンで終る冬仕度

今城夏枝

マニキュアの爪みかんの皮剥ぎとれり
通草の実はじけて果肉さらけ出す
わたくしも行くあてがない穴まどい

有吉堅二

神の留守宮司も巫女もゴルフとよ
熱燗や百まで生きてやるつもり
災ひのもとを封じる大マスク

井口寿々子

秋まつり頬かむりして踊りの輪
秋ともしドンキホーテの夢いずこ
秋入日高層ビルのデコトボコ

池田耕川

寝て起きて三度の飯の秋一日
口出しはならぬ貫首や菊飾る
釣れずとも湖の紅葉に満たされし

越前春生

山の神笑へば木の実どつと降る
無花果を食べてとまどふ心電図
ひたすらに鯔釣る臍が食べたくて

可知豊親

紅葉且つ散るや酌み且つ喰ひ散らす
秋あはれ撰にもれたる彼の一句
両の乳双子に頒つ豊の秋

草薙一朗

老骨は嫌はれ熟柿好まるる
囁きの二人の脇を放屁虫

清水呑舟

酢海鼠と闘ふ上下四本の歯
三代のなべて短足七五三
居酒屋で先生に説く夜学生

白井道義

老犬の腰を抜かして威し銃
親父似の案山子頬紅付けて立つ

杉村福郎

婚礼の裾ひるがへす芋嵐
半七に捕まへられし夜長かな
着せられて猿は嬉しげ菊の蓑

髙田菲路

毒の尾と鰭を削がれて?四角
とどかざる高さに笑ふ石榴かな
古池に落ち込む亀や秋の水

高橋素子

我勝ちに夕日に染まる赤蜻蛉
鵯の雄叫び無花果を切り裂いて
大根やつま無き刺身を独り食ぶ

田代青波

つぺこぺと小鳥や小路電線に
干柿の軒綱たるみ吾もたるみ
笠脱げば老でありたり風の盆

種谷良二

上役にしつかり搾られ椿の実
残業を夜なべといふてやる気出し
子一人にじじばば四人七五三

永島唯男

峯といふ峯の頂十三夜
椅子なりに躰折りまぐ秋思かな
黄な声の山彦がゐる黄葉谿

根岸敏三

毬栗を蹴る子ども等や長き髪
幸せの万歳のまま螻蛄の鳴く
高速道予定の庭の柿たわわ

壽命秀次

口ぐちに毒味言ふかな茸汁
アルミシートに尻あぶらるる林檎かな

髙田敏男

足湯にて浅漬大根談義かな
午前様妻の仕掛けた鳴子かな
赤い羽根愛鳥週間どこえやら

高橋真紀子

食欲の減る気配なし晩秋よ
眠れない不況和音の虫の宿
夕焼けのころに活力わいてくる

田代青山

仏壇の桃の紫斑を拝みをり
くろがねの大きな乳鋲秋の雨
サザエさん一家のやうな小鳥来る

田中章子

跳ぶばつたウルトラマンになりきれず
外国人落ちギンナンに顔ゆがめ
ひよどりの百羽集ひて鳴くのやら

飛田正勝

医者要らぬ喜寿と古希との小春かな
足湯てふ混浴ぬくし草津の湯
傘寿まで持てば金婚秋刀魚焼く

西をさむ

やれ打つな後期高齢秋の暮
焼鳥の匂染み付く愛の羽根
団栗の池へ転げてそれつきり

原田　曄

次の世は禅僧となる吾亦紅
蓋とれば用水桶に鰯雲
秋の蚊の知己のごとくにに寄り来る

高速道予定の庭の柿たわわ

彦阪義久

佐保姫がアメダスを見て思案顔
ニュートンが林檎の価格安くした
神の留守妻留守の間の隠し事

二神重則

秋来ぬと雀ふつくら旨そうに
秋日和ゼリーが並ぶ駐車場
この道は市況ページの黒い秋

堀川亮二

木犀の強き香ほりに捉えらる
犬猫の道は一本猫じやらし
逸るもの戸惑いしもの山紅葉

松井　勉

同窓会女性ばかりが帰り花
二つ目の嚔は半分声を足し
枯蔓や芽出しはどれも素直なり

虫倉蝉音

九月早やストーブ隣る山家かな
天高し昔は大志持つ一人
ルーペ買ふ水も空気も澄める村

山岡冬岳

躾なき足で障子を開けてをり
子の足の湯たんぽ替はり股に来る
いぶり炭女に泣かれをりにけり

山口濤聲

満天星のもみじドウダとばかり燃え
蕎麦打ちの修行半ばの温め酒
雨音と聞いてゐたるに秋の雪

秋の蚊の知己のごとくにに寄り来る

藤岡蒼樹

眉毛吊り諍ひ口や稲雀
爽頼や子犬は先の紐の張り
鼻でキス金に近ずく金木犀

藤森荘吉

愛犬もじやれついてゐる猫じやらし
ポニョポニョとうるさい夏は彼方へと

前川敏夫

角切られ覚えておけという目付
竜田姫まだらに山を愛で給ふ
老木にはなやぎの時蔦紅葉

三木蒼生

鰯雲鯖雲と言ひ休漁す
はたはたのはたと行手を見失なふ
鶏殺生することを祭と言ふ

百千草

自販機の引き込む早さ身に入みる
むかご飯滋味あるものは主張せず
黄落や老醜あれば老美あれ

山口えつこ

看護書の見飽きぬがまま流れ星
コーヒーのぬるさ程々長き夜
百均の中で完成ハロウイン

山下正純

栗ばかり選つて栗なき栗御飯
同じ目線同じ顔して彼岸花
木犀の花じゆうたんや雨の跡

山本　賜

水を噴く菊の子象や菊花展
こつこつと石橋渡る十三夜
心得て焼銀杏に爪楊枝

横山喜三郎

賑はへる百円ショップクリスマス
目出し帽尋問されをり十二月

日根野聖子

夜寒なり急須の湯気を注ぎ分ける
方言の丸出しのまま芋煮会
崩落の寸前柿の熟しきり

加藤澄子

芒の招くこつちの道でいいのかな
秋寒に皇太子殿下の若さかな
売りださる山頭火てふ新酒かな

山本あかね

水鳥の名を書き留めて忘れけり
お祝ひの羽搏く如し胡蝶蘭

藤原セツ子

白樺のどこまで続く枯葉踏む
崩れゐる土塀にすがりつく蔦や
縁焦げる匂ひしてゐる秋日和

山本けい子

カレンダに余白の多し神無月
団栗のあつといふ間に手に溢れ
家族みな集め夕餉の今年米